

スポーツとしての柔道、武道としての柔道性

JUDO as a sport, JUDO as BUDO

1K06A0383

指導教員 主査 小野沢弘史先生

宇野 哲郎

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

私は、16年間という長い間柔道を続けてきた。現時点では、自分の人生そのものと言っても過言ではなく、その柔道について論じていきたい。

日本で端を発した柔道は、今やオリンピックで世界各国の選手がメダルを争う競技へと発展している。しかしながら、国際化を果たしたことで武道からスポーツ競技へと変容し、本来の姿を失いつつある、と言われている。私自身も、この論文を書き始める前は同じように考えていて、今一度創始者である嘉納治五郎の思想を振り返ってみたのである。そこで私は衝撃的な事実直面したのだ。嘉納治五郎が柔道を作ったときに言った言葉は「柔よく剛を制す」。如何に合理的に相手を投げろか、ということを一に考えて作り上げたのだ。そして、よく言われている精神修養を目的とする「精力善用」・「自他共栄」という言葉は、実は後付けされたものだったのである。

国際化した中で精神面の欠落ばかりに目がいきがちであるが、嘉納治五郎が柔道を作り上げたとき、本当に純粋な柔道の姿というのは柔道体育法を核とする、身体面を重視したものだったのである。そこに立ち返ってみると、国際化した「JUDO」も違った側面が見えてきたのである。

以上を踏まえた上で、この論文では今後の柔道の向かうべき道を模索していきたい。

【第一章 「柔道」と「JUDO」】

日本の伝統的な「柔道」と、国際化した「JUDO」

の違いについて言われるようになってから久しい。

国際化を果たした「JUDO」は、その代償として本来の「柔道」が持っている素晴らしい精神性を損ねてしまった。これが昨今の通説であると言えよう。

果たして本当にその通りなのであろうか。今一度柔道のルーツからの見つめ直しをしていく。

【第二章 嘉納治五郎の思いを引き継ぐ JUDO】

柔道の創始者である嘉納治五郎。彼が目指した「柔道」の姿とは何だったのか。

柔術からつくりあげられ、三つの柱を持つ柔道の原点の姿を確認すると、現在よく知られているような武道としての柔道とは異なるものが見えてきた。その原点の姿と、競技スポーツとしての JUDO との共通点を探っていく。

【第三章 日本文化の象徴としての柔道】

嘉納治五郎は純粋に身体のみを対象として柔道をつくった。しかしその後、「柔道を国民教育に役立たせたい」という熱き思いをかなえるべく、「最終的には人格形成を目標とする」という道徳性を柔道に付け加えていく。

そうして「精力善用・自他共栄」の精神が生まれ、そのことにより柔道が武道として人々に認識されていく流れを追っていく。

【第四章 「競技スポーツとしての柔道」と「精力善用・自他共栄」】

「精力善用・自他共栄」という基本理念は国

際化する中で抜け落ちていったと、多くの日本人から嘆かれるようになった。だが、その原因は「国際化」にあるのではなく「競技スポーツ化」にあるのであるということを、今まで歴代の柔道家たちから寄せられたメッセージを基に考えていく。

【結びに】

武道を愛する日本人の多くに好まれていない世界の JUDO だが、武道として道徳面の欠落に目がいくばかりなのではないか。嘉納治五郎の原点に返って、少し違った側面から見ることでスポーツ競技としての柔道の長所を認識すべきだと考える。また、これからの柔道の進むべき道について自分なりの見解を述べる。